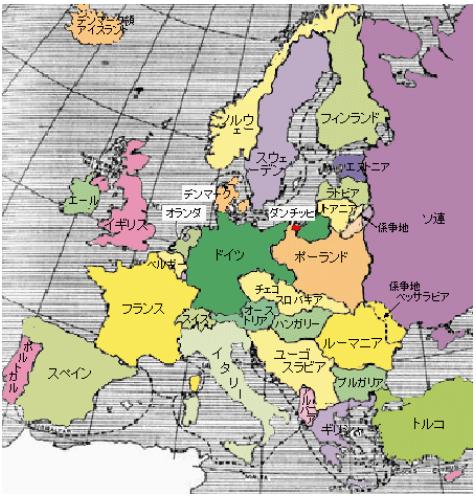
# 郷土・民族をめぐって
# 東欧の地で交錯した各々の想いをたどる

小中学校の音楽の時間。その時使った教科書でどんな名前が出てきたかー。試みに思い出してください。ご存じバッハにベートーベン（ドイツ），プッチーニやロッシーニ（イタリア）。モーツァルト（オーストリア）にサン＝サーンス（フランス）。いっぱう東欧の作曲家はどうでしょう。スメタナやドボルザークの名がすぐ出てくるあなたは，恐らく自分でも一度はクラシックの CD やレコードを買ったことのある方なのでは？

実は，教科書に載るくらい有名な作曲家がたくさんいる国は，みな世界史でお馴染みの大国です。近代以前のヨーロッパは，国家単位では［大国とそれ以外］，社会のレベルでは［王侯貴族とそれ以外］とにすっきり分かれていました。その結果，権力闘争ばかりが載る世界史の教科書に，庶民の日常はまるでとりあげられず，大国の影にあったはずの国々が，世界史の表舞台で語られる頻度もずっと低くなってしまいました。




1924 年当時のヨーロッパ概略図

第一次大戦まで，チェコとハンガリーは，オーストリア・ハンガリー帝国の一部だった。

{出典} http://ww1.m78.com/photo-2/europe%20after%201924.gif

お金のかかる芸術活動は，権力者の庇護の下で発展します。少数の大国の少数の権力者のため，選ばれたエリートたちの作る創作上の決まり事はやがて理論として定着し，伝統芸術の根幹を形づくることになったのです。

上に立つ国や権力者が，下から財や労働を搾取し，代わりに社会の安定を与える。こうして保たれていた中世社会に大きな変革をもたらしたのが近代の到来でした。王侯貴族よりもお金持ちな二世紀前のホリエモン（資本家）たちは，国境を軽々と越えていきます。彼らは中央の国で作られた文化を辺境へと紹介し，辺境の文化を持ち帰りました。上下がはっきりしていたおかげで安定していた社会が揺らぎ始めます。

音楽の世界も同じでした。猫も杓子も取り澄ました標準語口調で，似たり寄ったりの起承転結しかしない従前のクラシックに飽き飽きした若い作曲家たちは，中央の学府で学ぶ伝統的な作曲法にとらわれなくなっていきました。庶民には庶民の，東欧には東欧の音楽がある。自分たちは権力者でも，西欧の人間でもない。このまま人の真似を続けるより，自分たちの土地だけがもつ音楽的財産へ目を向け，それに根ざした語り口で作曲するほうが，芸術家として正直じゃないかと考えたのです。彼らは一斉に地方へ下り，村々を渡り歩いては民謡を集めて素材にし，広く国民全てが愉しめるクラシックを作ろうとしました。こ

うした運動が世界中で一斉に始まったのです[1)]。この動きが本格化し，やがてピークに達する時期，それが今回演奏される作曲家たちの生きた時代－19 世紀半ばから 20 世紀初めにかけてのことです。

## カリヴォダからコダーイへ～郷土愛のめざめ

ヤン・ヴァーツラフ・カリヴォダ Jan (Křtitel) Václav Kalivoda は 1801 年 2 月 21 日チェコのプラハに生まれました。1811 年にプラハ音楽院へ進み，14 才でヴァイオリン奏者としてデビューを果たしますが，1821 年にドナウエッシンゲン侯国宮廷楽長に就任してドイツへ移住します。やがてドイツ名（ヨハン・ヴェンツェル）を名乗るまでになった彼は，生涯を宮廷音楽家として過ごし，1866 年 12 月 3 日，カールスルーエで死去しました。彼の音楽には，前近代的な生き方を愚直に守る自身の美学が色濃く投影されています。

彼とは対照的な人生を送ったのが，近代ハンガリーを代表する作曲家ゾルターン・コダーイ Zoltán Kodály でした。1882 年 12 月 16 日ケチケメートに生まれた彼は，ブダペスト音楽大学でハンス・ケスラー（ドイツ人）に作曲を師事しました。しかし彼がカリヴォダと決定的に違っていたのは，1900 年からパーズマーニュ・ペーテル大学へ進み，言語学や民俗学を学んだことです。各地を歴訪し民謡収集に従事した彼は，自国に眠る音楽的遺産の価値を，いち早く認識できるカードを手に入れていたのでした。彼はその最初の成果を 1906 年の博士論文『ハンガリー民謡の音韻構造』にまとめます。パリへ留学し最先端の音楽を知りながらも，1907 年の帰国後は 1967 年 3 月 6 日に世を去るまで，民謡に基づく音楽教育体系の整備に尽力することとなるのです。

郷土に根ざした音楽性（方言）を追い求める彼の音楽は，やがて土臭く朴訥なものへと変貌を遂げます。宮廷貴族の洒落っ気や装飾美は乏しく，ゴツゴツ武骨でぶっきらぼう。けれど，表面上の虚飾を取り去ったあとに残る生々しい生活の臭いが，彼の音楽を価値あるものにしたのでした。

今回採り上げられた三重奏はまだ若い頃の作品で，優美なロマン派情緒をたたえています。しかし，注意深く耳を傾ければ，随所に用いられた民謡風の節回しが，生き生きと庶民の日常のすがたを掴みとっているのに気付かれることでしょう。音楽を通して，郷土に根（ルーツ）を降ろした自己を再発見する－これが，音楽における近代化のひとつの姿でした。

## クラインとヴァイネル～異郷徒のまなざし

世界的な規模で，音楽が郷土への想いを音に換え，その価値を賞揚しはじめた時代。その片隅で，異郷の民として傍観者の立場におかれた人々がいました。それが，国土を持たないがゆえに自らのルーツと郷土との繋がりを断たれた，ユダヤの血を引く人々。残る二名の作曲家たちです。ドイツの隣国チェコとハンガリーに生まれた二人。その違いはやがて，各々の運命を大きく変えることになります。二人の人生を

---

[1)] ちなみに日本では山田耕筰や滝廉太郎がこの世代にあたりますが，当時の日本は西洋音楽の咀嚼が第一課題。民謡収集は坊田壽眞，柳田圀男，藤沢衛彦ら他分野の研究者や教師が中心で，奔流とはなりませんでした。のちにこれが大きなハンデとなるのは，皆さんご承知の通りです。

見ていきましょう。

ギデオン・クライン Gidéon Klein は 1919 年 12 月 6 日プシェロフ生まれのユダヤ系チェコ人です。10 才で最初の曲を書き，11 才でピアノを学んだ彼は，1938 年にピアノ専科へ進むや僅か一年で修了。翌年には演奏家デビューを果たすほどの才気を見せました。続いて彼は作曲法科に進み，アロイス・ハーバに師事します。しかし，チェコは当時ドイツの統制下にありました。ナチスの台頭でユダヤ人は厳しい状況におかれ，彼は英国留学の機会を得ながら，断念を余儀なくされてしまいます。ほどなく捕らえられた彼は，1941 年 12 月テレジン強制収容所[2] へ収監されました。半ば死を覚悟していた彼は残された僅かな日々を作曲と演奏に捧げますが, 1944 年にアウシュヴィッツ収監が決まり, シレジア地方のフュルステングルーベへ移されました。

演奏される三重奏曲は，死地へ赴く９日前に書かれた絶筆。ただならぬ切迫感を伴ってグロテスクにおどける両端楽章と，理不尽な運命への呪詛と悲嘆が溢れる緩楽章。二者の強烈なコントラストに，当事者として死を肌で感じていた彼の揺れ動く心模様が投影されています。しかし，この期に及んでなお彼は，生地モラヴィア地方の民謡を素材として執拗に用い，先鋭的な語法（土俗的な変拍子やポリモード）の味付けを施していく。この曲は，それら新しい音楽表現の全てを《頽廃芸術》と呼んで排斥しようとしたナチズムに対する，決然としたプロテスト・ソングでもありました。

1945 年 1 月 27 日，敗走するナチは，彼らもろとも施設を殲滅。連合軍が同地を解放する僅か数時間前の出来事でした。

いっぽう，レオ・ヴァイネル Leó Weiner は 1885 年 4 月 19 日，ハンガリーのブダペスト生まれの作曲家です。コダーイと同様，彼もケスラーに師事し，在学中に作曲した『セレナーデ』で高く評価されます。しかし，彼はユダヤ人でした。ナチとの敵対を怖れ，彼らの政策に大きく妥協する故国。それを目の当たりにしたヴァイネルが，コダーイのように民謡収集を行うことは最後までありませんでした。

「ハンガリーのメンデルスゾーン」と称される彼の音楽は，コダーイというよりむしろカリヴォダの美意識に近いものがあります。カリヴォダとの違いは，彼の傾倒した音楽がフランス近代のそれだったことだけです。サロン音楽のように優美かつロマンティックな相貌をみせつつも，旋律のそこここに儚げな諦観の漂う三重奏曲には，ルーツに対する褪めた視線とともに，決して共感することの叶わない《郷土愛》への遠い憧れの念が，旋律の形を借りて確かに同居するのでした。

およそ同じ民族の書いたものとは思えないほど対照的な２人の三重奏曲は，各々の置かれた立場を鮮やかに反映しています。異郷の徒として，国土とアイデンティティとを切り離されたユダヤ人の悲哀の深さは，二作の間に横たわる巨大なギャップのなかに聴き取ることができるのかも知れません。

（鈴木晃志郎）

---

[2] ナチが対外プロパガンダ目的で設置した芸術家向けの中継収容所。のちチェコ管の指揮者となるカレル・アンチェルや，作曲家のパヴェル・ハース，ヴィクトル・ウルマンらが収監されていた。